

近世浄土真宗寺院本堂の研究 (そのⅢ)

西光寺本堂と徳円寺本堂

岡野 清

STUDY OF MAIN HALL IN THE JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART Ⅲ)

Kiyoshi OKANO

西光寺本堂 瀬戸市菱野町

創立と沿革

真宗大谷派に属し、小規模な集落の甬刹で、特に著名度はない。近くの真宗高田派本泉寺の資料によると、以前は瀬戸市赤津の萬徳寺を本寺として、本泉寺末寺に属し、西光坊と称していたが、その後、寺に昇格して、真宗大谷派に帰属した。建立についての縁起文献はなく、確証の提示は不能であるが、寺の伝承によると、当時菱野に居を構えた大沢治郎左衛門等の創立で、元禄4年(1691)頃に本堂を建立したと言う。細部の絵様型式などから推してもその頃の建立は容認し得る。

規模 構造

堂は桁行5間半、梁間5間半、屋根入母屋造茅葺(現在は鉄板を覆せる)で前面には実長2間の向拝をつけ、



写真1 向拝斗拱及び虹梁木鼻



写真2 向拜手挟

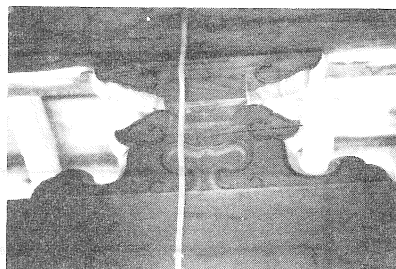


写真3 向拜墓股

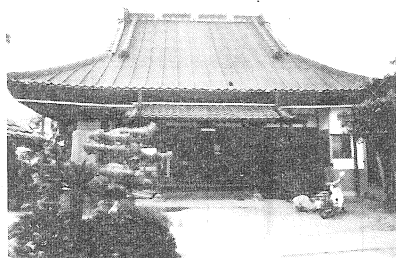
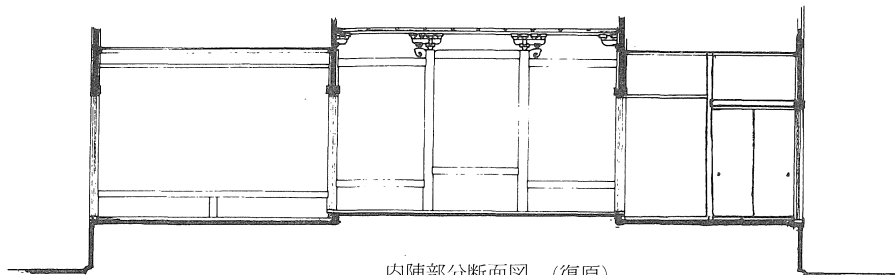


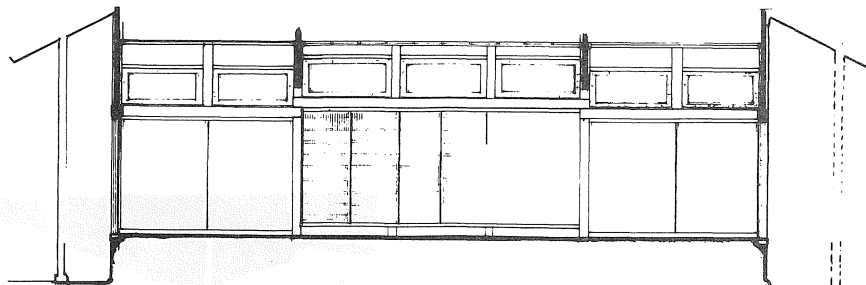
写真4 本堂東面全景

南側面(堂は東面)の余間脇2間と背面に半間余の下屋を出す。何れも主屋屋根下に取りつく。前面1間通りは堂内に取り込まれた広縁で、次の奥行2間半迄外陣、更にその奥に2間の内陣と両脇に余間を取り、この部分は敷居下に蹴込板を入れて床を上段とし、北余間では背面の下屋に床を張出して座敷とする。南余間南の下屋部分を除き、落縁を廻らす、取合いの関係で北側面と背面は現在は廊下となる(図1、写真4)。

向拝は見付巾2間で几帳面取櫓材角柱の下にだけ粽をつけ、石製礎盤を据える。柱間には櫓の虹梁を架け、木鼻を出し、斗拱は同じく櫓材実肘木付連三斗で、桁を受け、松材の手挟を入れ、繫虹梁はない。中備に墓股をおく。虹梁には錫杖彫、袖切、木爪型の渦、若葉、欠眉付



内陣部分断面図 (復原)



外陣部分断面図 (復原)

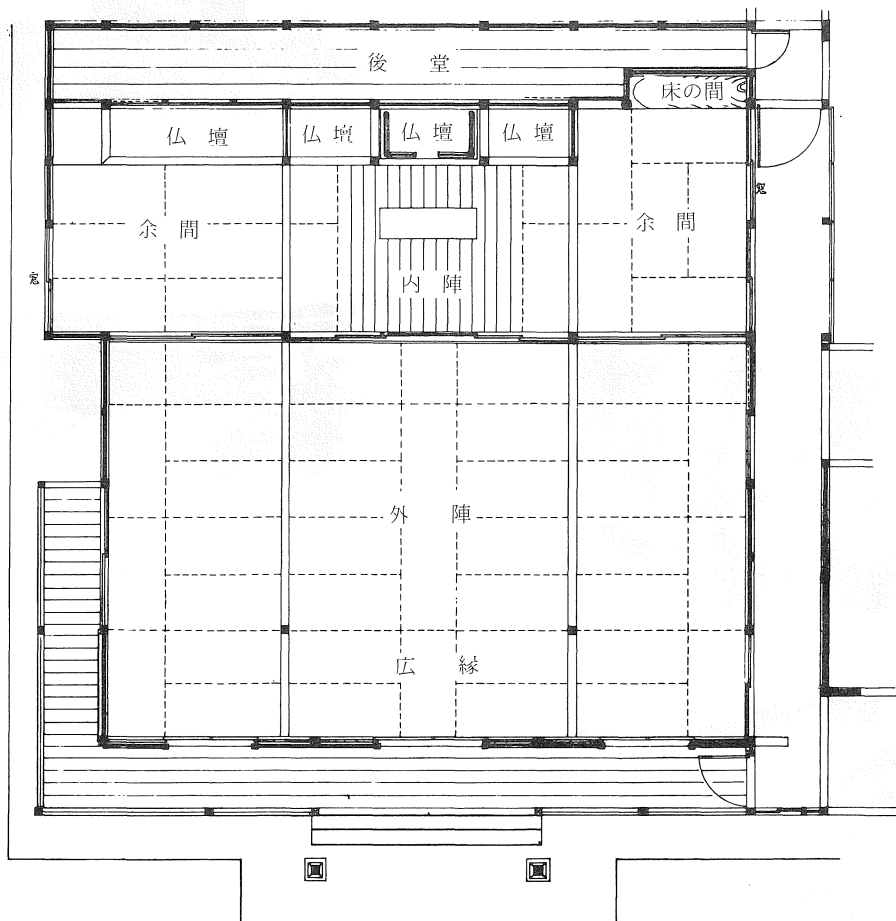


図1 西光寺本堂現状平面及び断面図

きで、木鼻、臺股共元禄頃の様式と見て差支えない（写真1, 2, 3）。向拝軒は1軒、半繁樞、棧瓦葺で、茅葺の本屋根下に庇状に取付けている。軒反りはなく（写真4, 5）、木階2級、濡縁は手摺付。正面広縁外は柱ではほぼ3等分し、各間とも2間弱のスペンで、敷居、差鴨居を入れ、差鴨居上には中央に東を立て、飛貫1本を通して漆喰喰とし、各スペンの両袖に雨戸1枚を収納する戸



写真5 正面向拝と戸締

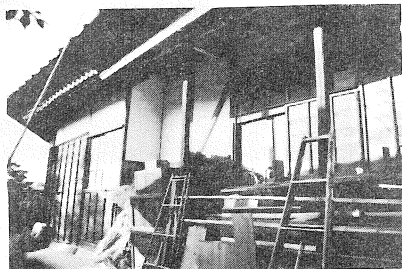


写真6 南側面

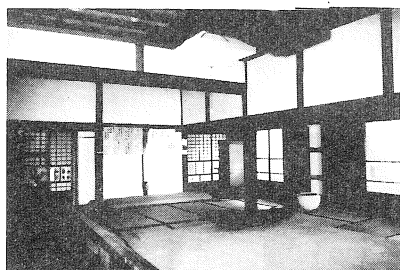


写真7 外陣

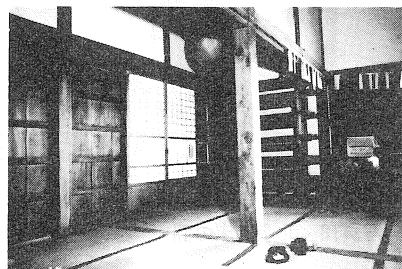


写真8 広縁南東隅

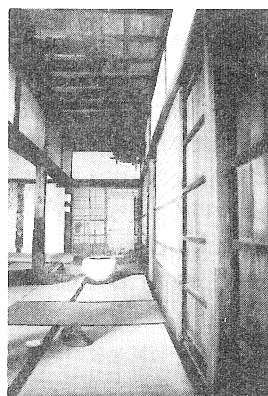


写真9 広縁を南からみる

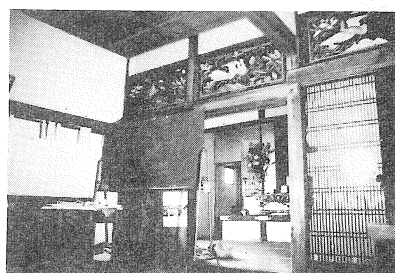


写真10 南余間正面

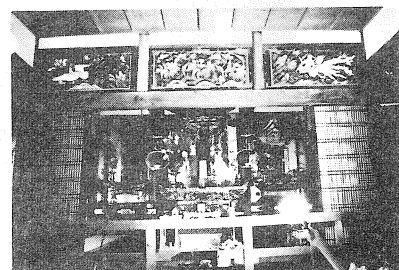


写真11 内陣中央間正面

袋を貼りつけ、2本溝で戸、障子共拝み合せて戸締りする。前面は手前1間は元広縁、その奥の2間半の側面中央に柱を立てて各1間半は塗壁、引違い障子、袖壁付片引戸等で納め（図1）、長押上は漆喰喰とし、下の壁、戸袋部分は下見板で保護している（写真6）。

内部の元広縁と外陣境は中央間で2間半、両側の間で1間半に分けて柱を立て、内陣余間境に対向し、柱間梁行に広縁外陣境に盲敷居首鴨居を入れ、中央間で2ヶ所両脇間で中間に釣束を入れて小壁は漆喰塗とし、鴨居上両側に内法長押を付す。現在は広縁外陣とも畳敷き。外陣中央間と両脇間の境は高所に太い貫を通して中央に東を立てた垂壁をつけて外陣天井を3分し、中央間と広縁には梁行に棹縁を配し、両脇の間では桁行に棹縁を渡して天井を張る（写真7, 8, 9）。

内陣及び余間と外陣との境は敷鴨居、内法長押を内陣内で背違いに余間より高く入れ、内陣両余間前では蹴込板を入れて上段とし、2本溝の敷鴨居に松の大木（南）と芭蕉（北）を採画した杉板戸を引違いで建て、内陣は余間より更に1段と上げた床に3本溝の敷鴨居に黒漆柳格子6本を入れて戸締る（写真11）。

鴨居上は両側に内法長押を付し、牡丹に鳩、鷹、鳳凰を飾った高肉透彫金箔おし極採色の欄間を嵌め（写真10、11）、その上の楣上に小壁を設けるが、裏側は単なる漆喰壁で欄間の背面は一切見せない（写真13）。

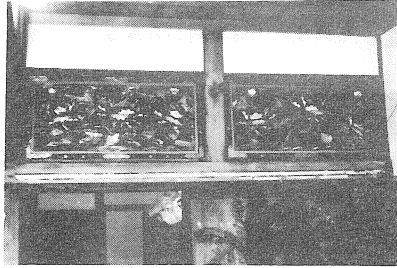


写真12 北余間正面



写真13 南余間から振返って外陣をみる

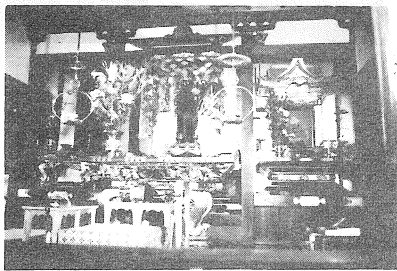


写真14 内陣仏壇

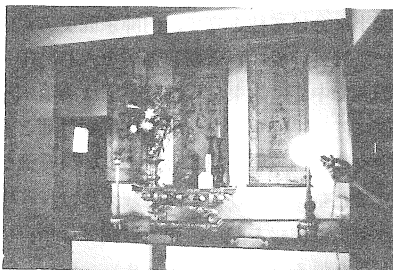


写真17 南余間仏壇

内陣背面の仏壇列は框下に縦羽目を入れた簡素なもので中央の間を1間、左右の脇仏壇は4.5尺となり、中央仏壇は阿弥陀如来像を安置した宮殿を入れる為に仏壇框が低くされ、北脇仏壇には肘子入り親鸞像をまつる（写真14 図1）。中央仏壇両脇柱間には袖切、欠眉、渦、若葉つきの虹梁を渡して木鼻を出し、連三斗拱を載せ、中備に髹股を配し、脇仏壇上ではこの木鼻下に貫を通してその上を壁とし、両端柱上には出三斗拱を置いて出桁をを支え、格天井を張る（写真15、16）。

余間との境には敷鴨居に細い2本溝を入れ、中央に建具止め金具を入れているので、襖4枚建てにしたことが知られる。

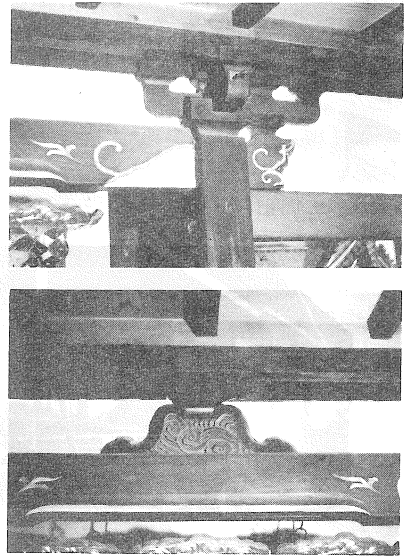


写真15, 16 内陣仏壇上部



写真18 北余間床の間

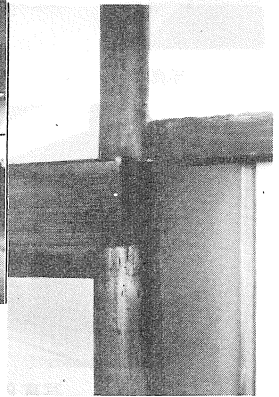


写真19 北余間の床柱

南余間は南の半間の下屋をとり込んで、内部では巾2間となり、背面に1間半見付の仏壇を設け、前面には2間の落掛を入れてその上を壁とし南端の半間から背面の後堂に出られる（写真17）。

南側面には前方1間に中敷居を入れて障子窓をつけ、鴨居上には内法長押を通し、天井は棹縁天井とする（写真13）。

北余間では背面の下屋に張出して北から1間の床をつくり、残り半間は背面の後堂への出入口とし、床柱は磨丸太とする（写真19）。北側の西1間では中敷居として、2間共に障子を建て、鴨居上には長押を通す。天井は桁行に棹を通した棹縁天井とする（写真18）。

復原的考察

この堂は殆んど建立時のままの姿を留めているが、それでも若干の変更をみる。

正面広縁外では、中央の2間のスパンでは敷鴨居が3本溝で中央に建具止め金具があるので、戸4、障子2の戸締りであったが、両脇の各2間弱には中敷居が入って同様の戸締りがされていた（図2）。広縁の南妻は現在も壁であるが、柱の風蝕状態からみて元々壁のようであ

り、北妻では西半間偏りに板張（胴椽穴あり）の戸装を設けて3尺の袖をつけ、戸1障子1で戸締りしたらしい。

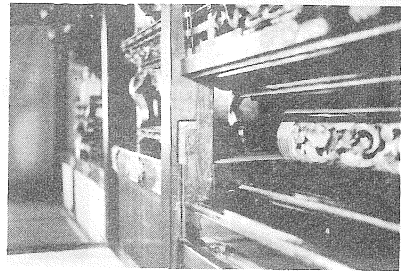


写真20 内陣中央仏壇櫃を下へ移動した痕跡

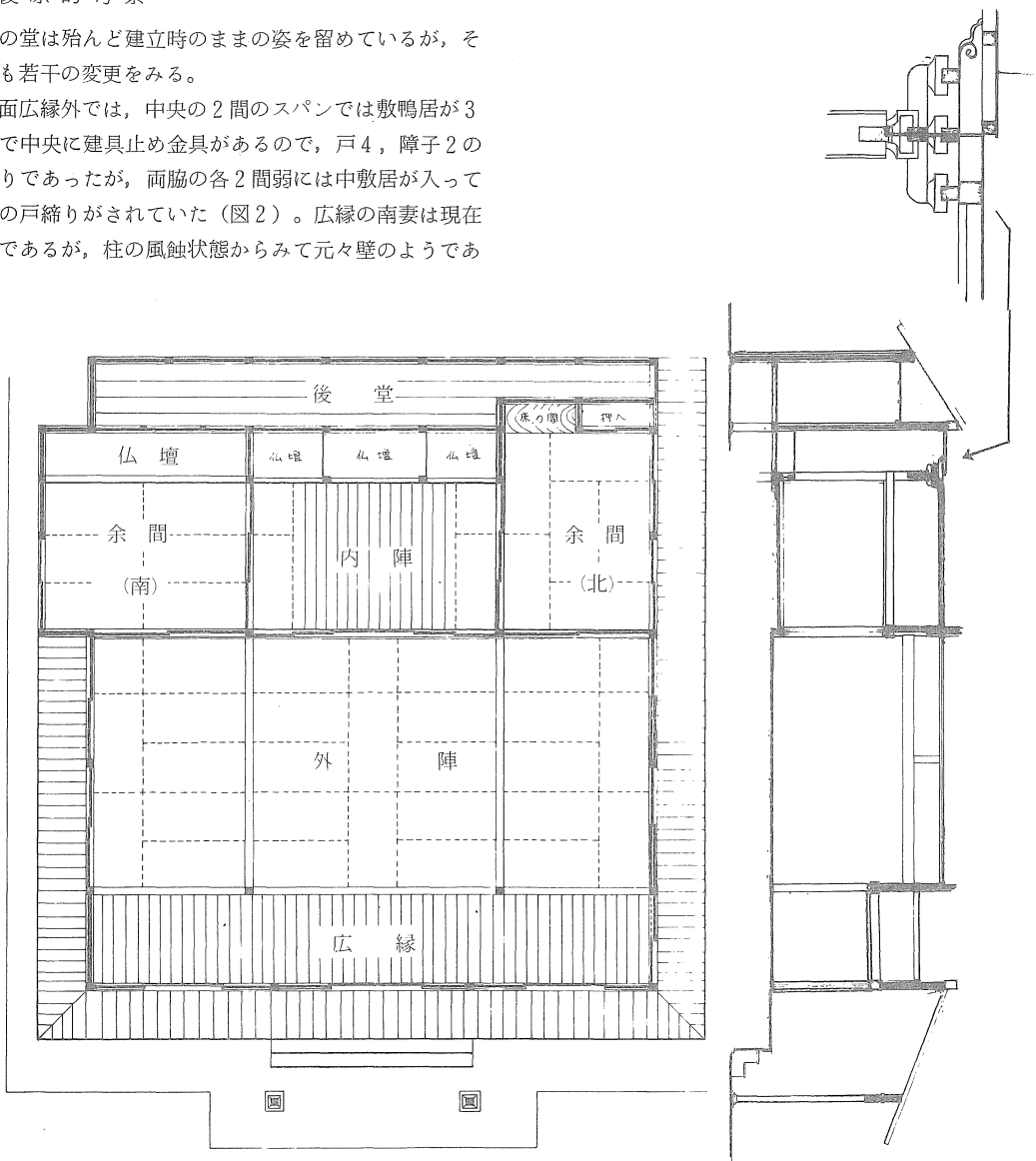


図2 西光寺本堂復原平面図及び断面図

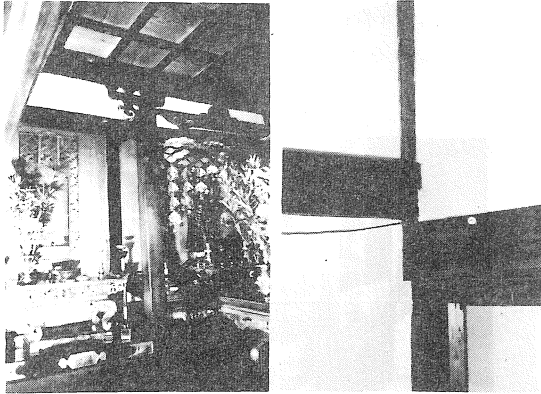


写真21 内陣天井 写真22 北余間の北西隅で
長押が留になっていた

現在は畳敷きとなっている広縁も床板が磨き込まれているので、元は板間であった(図2)。外陣との境では現在も盲鴨居になっているので、もともと解放であったと考えられる(写真8)。

外陣両側面の各柱間には3本溝の鴨居を残すので、戸2障子1の戸締りであったろう。天井は新材に代っているが、もともと棹縁天井に変わりはなかったと思われる。

内陣仏壇は現在中央の壇框が低くされているが、もとは余間から中央にかけて次第に壇が高くなっていて、極めて自然であった。途中大きな宮殿が入って変更したも

のである。(写真20, 図1)。天井の格天井も材が新しいが、もともと格天井とみても不自然ではない(写真21, 図2)。

南余間の仏壇は今は見付1間半であるが、対向する南側面の柱に框が取付いていた穴があり、2間にすることによって落し掛と天井の間及び仏壇前羽目にある束も中央に納まり、自然になる(写真17, 図2)。現在背面への出口脇柱にも貫や間渡し竹の穴があるので明瞭である。背面への出口は塞がれ又後堂も主屋柱から庇が出て、南隅欠きになっていたことも風蝕と痕跡によってわかる。この背面への出口は仏式上、行道が行える装置に変えた時に改造したものであろう(図1)。

北余間では、北側の柱間にある中敷居は無くなり(中敷居下内部の風蝕と敷居の溝による)又床は南偏りにあったことが床框や落し掛の仕口跡が現在と逆になっており(写真19)、西北隅で長押が留になっていた痕跡を残すので、北偏りに押入れがあったと見られ、従って床は見付4.5尺であったと考えられる。又床柱は痕跡から見て現在のものを使っていたことが分るが、この柱の現在床の間になっている北側に襖の当りがあるところから、押入れの存在を証することが出来る。

徳円寺本堂 稲沢市福島町

創立と沿革

本寺は真宗大谷派に属し、かつてここに薬師堂があったが、寛保二年壬戌八月（1742）海東郡蟹江町にあった寺籍を薬師堂の堂主であった中興秀善が現在地に移し、寺を創建したと寺の文書にある（図1）。同文書によれば、その後明和2年（1765）3月には「只今迄の御堂大破仕り、長五間、梁三間に両方に九尺づゝ付下て再建」したことが記され、安永3年（1774）の文書にも三代博淵が御堂建立したので、諸仏具を惣村中が寄進した古記録がある。しかし現状と比較してみてもこの寸尺と一致した捉え方は出来にくい。寺蔵の古図に現堂と近似点も見られる平面図が描かれているが（年次不明）、これにしても件の構造とは一致しない。しかし別の覚に（図2）

覚

- 一 薬師 享保年中に引うつり
 慥ニハ相知シ不申候
- 一 半鐘ハ正徳元年ニ惣村中より寄進
- 一 弥陀地藏之事も相存し不申候
- 一 御堂ハ五間半四面但し附下共ニ
- 一 境内ハ五畝歩但し高付式畝歩ハ村人共御年貢代
 内薬師分米壹斗九升余村のだけ

とあり五間半四面という寸尺は四面を四方の意にとれば現堂と一致すると見ることが出来る。

規模構造

現本堂は外陣前端より後堂後端まで6間半。外陣の中央と両脇の間、更に後補された北の間まで7間あるが、これは旧態より更に北へ1間半乃至2間、西へ1間つき起し、更に南に薬師堂をとりこんでいるからである。それを除けば桁行5間半梁間5間の後方2間分の側背に半間の下屋を付した形の堂と見られる。前半の桁行5間半、梁間3間が外陣、後半の桁行6間半（内両端各半間は下屋）梁行2間半（内背面半間下屋）が内陣、余間に相当し、内陣の後方には更に半間の付下げが加わっている。そして外陣の正面及び南側面に濡縁をめぐらしているが、北側面の縁は現在は堂内にとりこまれてしまっている（図1）。そして前面には見付2間半の向拝がつく。軒は1軒半繁垂木。屋根は寄棟造棧瓦葺（写真1、2）。

向拝柱は几帳面取角柱、上下粽つき、石製礎磐上に立ち、柱間の虹梁は、渦、若葉つき袖切、欠眉、錫杖彫をつけ、虹梁端木鼻、斗拱唐様連三斗、中備蓑股、手狭、鯨海老虹梁がつく。何れも渦、若葉の絵つき（写真2）。

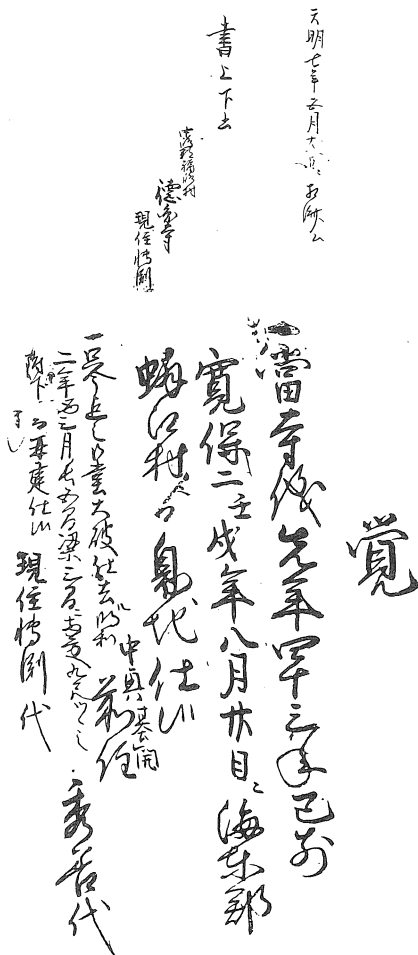


図1 天明7年5月18日三代博淵氏が記したもので寛政代にも同文がある

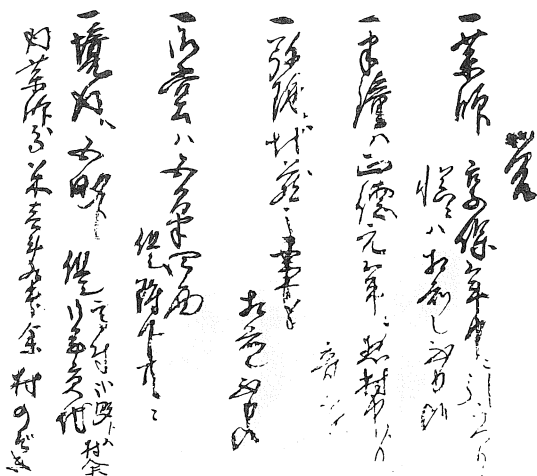


図2 御堂が5間半4面であった文書

柱は来迎柱を円柱とする他すべて面取角柱。外陣正面は中央の2間半と左右各1間半に分け、更に北のつけ足し1間半も外陣内にとりこみ、各柱間には敷居と差鴨居を入れ、中央2間半の差鴨居を高くとりつけ、腰高硝子障子4枚引、その他各間腰高硝子障子3枚建て、鴨居土小壁には飛貫を通す（写真2）。外陣側面各1間毎に柱を立て、敷鴨居、内法長押を通し、小壁に飛貫を通し、柱間硝子障子引違い、外に雨戸を引く。

外陣内部は中央2間半と左右1間半に分ける。柱列の柱間隔は1間半で、柱間には絵様つき虹梁を入れ、板葦股をのせて天井桁を支え、棹縁天井を張る（写真3、4）。

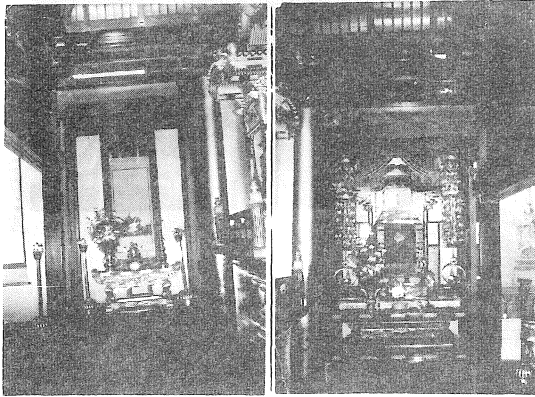


写真5 内陣南脇仏壇 写真6 内陣北脇仏壇



写真7 南余間奥の仏壇

内陣は間口2間半で、外陣中央間に応じ、奥行2間半背面の半間の下屋に脇仏壇をおき（写真5、6）、中央に後門を開く。余間では側面の下屋を含めて2間4方の背面に奥行半間の仏壇を設ける（写真7、8）。余間は外陣より足固め長押一段分だけ上げた上段とし、内陣床は更に敷居1段分だけ高くし、内陣前面には後補の柱を入れて3分し（写真9）、余間、外陣境とも敷鴨居、内法長押を通し、内陣前の内法を長押背だけ高くする。柱間には巻障子を入れる（写真10）。

内陣前は釣束で内法長押上を3分し、余間前は釣束で2分し、後補柱を除く各柱と釣束上に粽をつけ、頭貫、台輪を通し、斗拱は出組（写真11）、中備に葦股を入れ

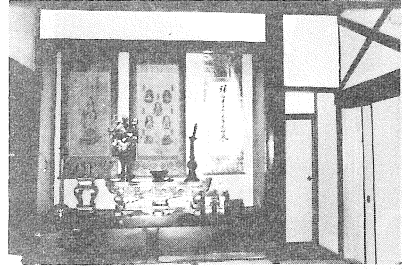


写真8 北余間奥の仏壇と右端の後堂への通路

る（写真12）。そして内法長押、頭貫間には高肉彫金箔押し入りの欄間をはめる（写真13）。

内陣では前面より2間の通りに来迎柱円柱を立て、余間の仏壇前の柱と一列に並んで柱上に粽をつけ、円柱との間に飛貫を通し、その直上の来迎柱間の頭貫の延長上に羽目板を入れ、来迎柱間頭貫の先を木鼻とし、その上に台輪を通し、柱上に出組斗拱、拳鼻及び実肘木付きをのせる（写真14）。余間との境には敷鴨居、内法長押をまわし、中央に釣束を入れ、束上にも粽をつけ、柱頂との間に虹梁をかけ（袖切、絵様つき、欠眉入り）、台輪をのせ、柱及び束上に頭貫、出組斗拱、拳鼻つきをおき、天井は折上小組格天井（写真15）。

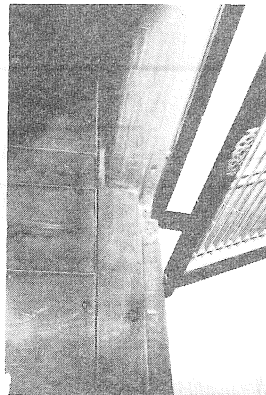


写真9 内陣と外陣境

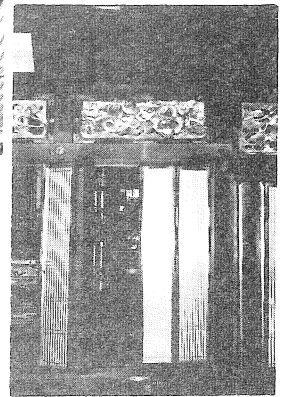


写真10 内陣北端正面

来迎壁の前には唐様の仏壇をおき、宮殿を安置して阿弥陀像をまつる（写真14）。来迎壁裏には半間の通路をへだてて脇仏壇が設けられ（写真5、6）、中央間に後門を開き、この部分は棹縁天井とする（写真16）。

南北余間の側面（飛檐間との境）には1間毎に柱を立てて敷鴨居内法長押を巡らし、柱間には襖を入れて長押上を小壁とし、南余間では背面に奥行半間の仏壇を設けその前面に虹梁を渡し（絵様つき袖切欠眉つき）、虹梁上に板壁をつくる（写真17）。

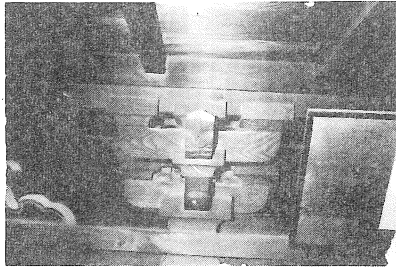


写真11 内陣前の出組斗拱

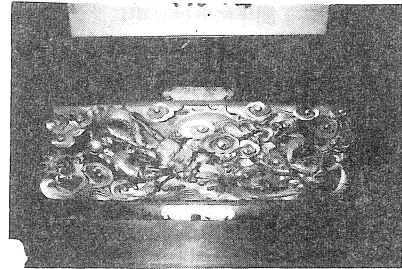


写真13 内陣外陣境正面上の高肉彫金箔押し欄間

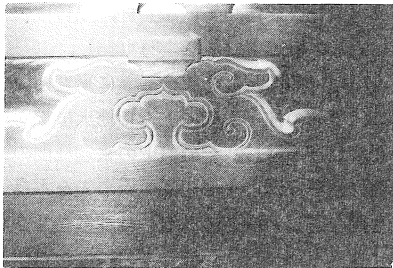


写真12 内陣外陣境正面上の中備板蟻股

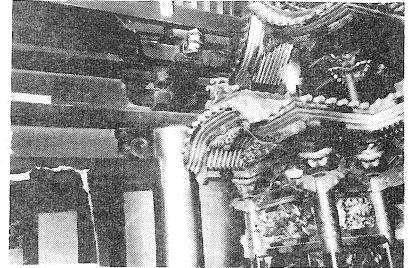


写真14 内陣来迎柱上の斗拱及びその前の宮殿

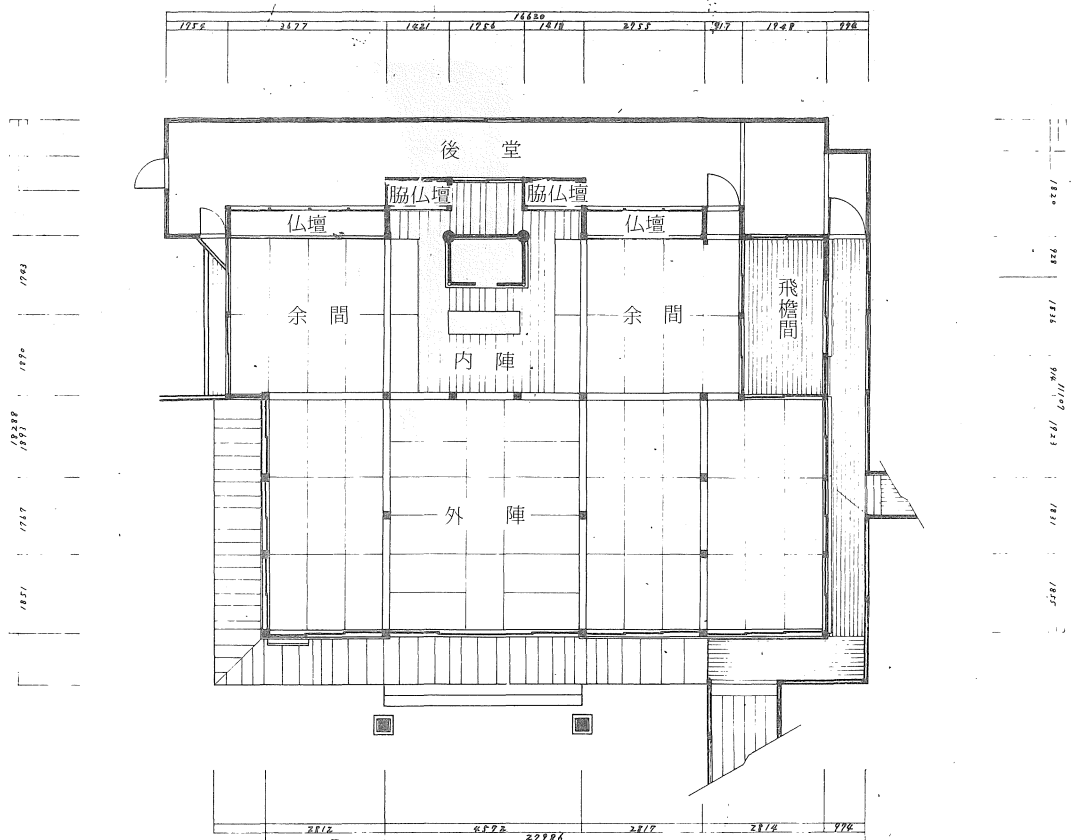


図3 徳円寺本堂現状平面図

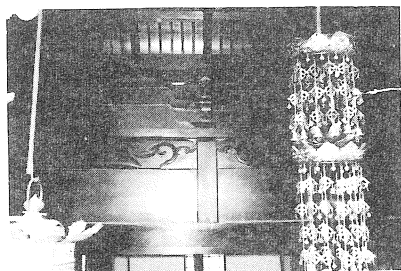


写真15 内陣中から南余間境の小壁をみる

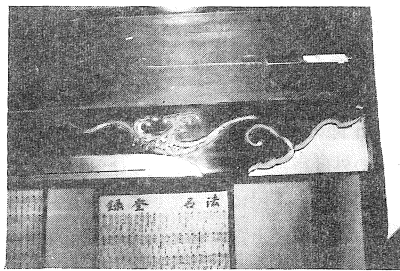


写真17 南余間仏壇上虹梁

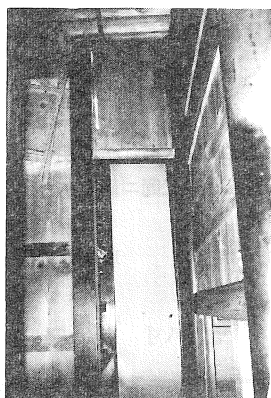


写真16 来迎壁 ウラ

これに対し北余間では1間半間口の仏壇を設け、その前には落掛を入れて上を小壁とし、残る半間は背面の後堂に通じる片開戸への通路となっている（写真8）。天井は両余間とも棹縁天井である。尚、天井を除く内陣余間の木部には黒漆が塗られ絵様の要所には金箔をおいている。

復元的考察

創建当時は小型で簡素なものであったが、漸次改造附加されて中型寺院に改まっているので、内陣と余間にはかなり大きい変更が加えられていることが種々の点から判明する。

先ず内陣前面を3分する中央の内法間に立つ柱は後補で、もとは巻障子もなく、鴨居は3本溝で（写真18）、6枚の格子戸が立っていたと考えられる（図4）。鴨居は中間の2本の釣束で支えられていた（写真3, 10）。

南余間の仏壇前虹梁の旧取付仕口跡（現在は埋木され黒漆塗）と仏壇框の取付痕跡が1間前方の柱にあり、この柱に対する内陣との境の釣束にも虹梁の仕口の痕跡が残る。また仏壇前柱から半間前に残る内法長押上の束（素木）には壁貫や木舞の仕口があって、元はここに仏壇後壁が設けられていたことを示す。仏壇前の虹梁の渦は形式が古いが波を混じた若葉は様式上からみても後につけたものと見られる（写真17）。

次に北余間では仏壇前の2間分の中間の天井桁に丸柱

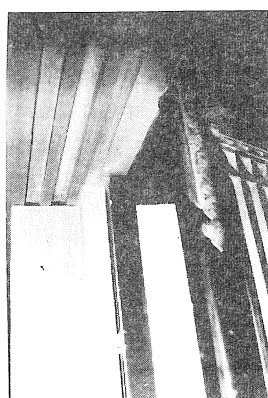


写真18 内陣、外陣境の後補の柱（白色）巻障子、元の三本溝鴨居

（床下に磨丸太の根元残る）のとりついた痕跡があり、その列の北端の柱には床框と落掛のとりついた痕跡があり、その後方半間の柱にも板決りがあって、北1間の床の間であったことが知られ、南1間は畳の踏込みになっていたと考えられる。

内陣については余間との境の虹梁や斗拱の絵様の形式が新しく、幕末以後の改造を受けたものと見られるが（写真15）、来迎柱列の木鼻や斗拱の形式は古いので、これは元から存在したと考えられる。そして塗によって痕跡は見出せないが来迎壁とこれに対向する余間境の柱の相對する面には打診によると、框のとりついていた埋木があるらしく、この柱列の前か後に仏壇が存在したとは見られない。但し現在の内陣来迎柱の半間後に立つ2本の柱は新しいのでそれが仏壇背面の柱であったとは見られない。瀬戸菱野町の西光寺の例に見るように、仏壇が後にあったとするべきであろう。小組格天井が素木であるのも不自然であるが、支輪の裏に旧天井廻縁と見られる欠込みが廻っており、元は一面の棹縁天井が張られていたものと考えられる。余間との境の虹梁や斗拱も絵様の形式が新しいので、元は敷鴨居内法長押と北余間境の中央の釣束は存在したであろうが、内法長押から天井廻縁までは壁になっていたとすべきである。

尚、南余間の背面には奥行2間の空所が残り、その外

側柱の外は風蝕も強いのでここに別室を考えるべきもの
のようであるが、そこへの通路としては内陣仏壇前の半
間の入口が考えられる。

余間の外廻りの柱には風蝕が強いので元飛檐間や後堂
はなく、外陣のまわりに濡縁がまわっていたこととな
る。余間の外は戸襖が設けられていたと考えられ、その
部分の半間は既に下屋になっているので、縁のまわる余
地はなく、襖は事実上常時締め切りの状態であったと考
えられる(図4)。

建立年次考証

なお寺蔵の

天明七年(1787)五月十八日相済ム書上下書
中嶋郡福嶋村

徳圓寺

現住博洵

の表紙のある綴の中に

- 一 右之通御裏御座候処先年流失仕今度新ニ御願御
免被下候

積乗如判

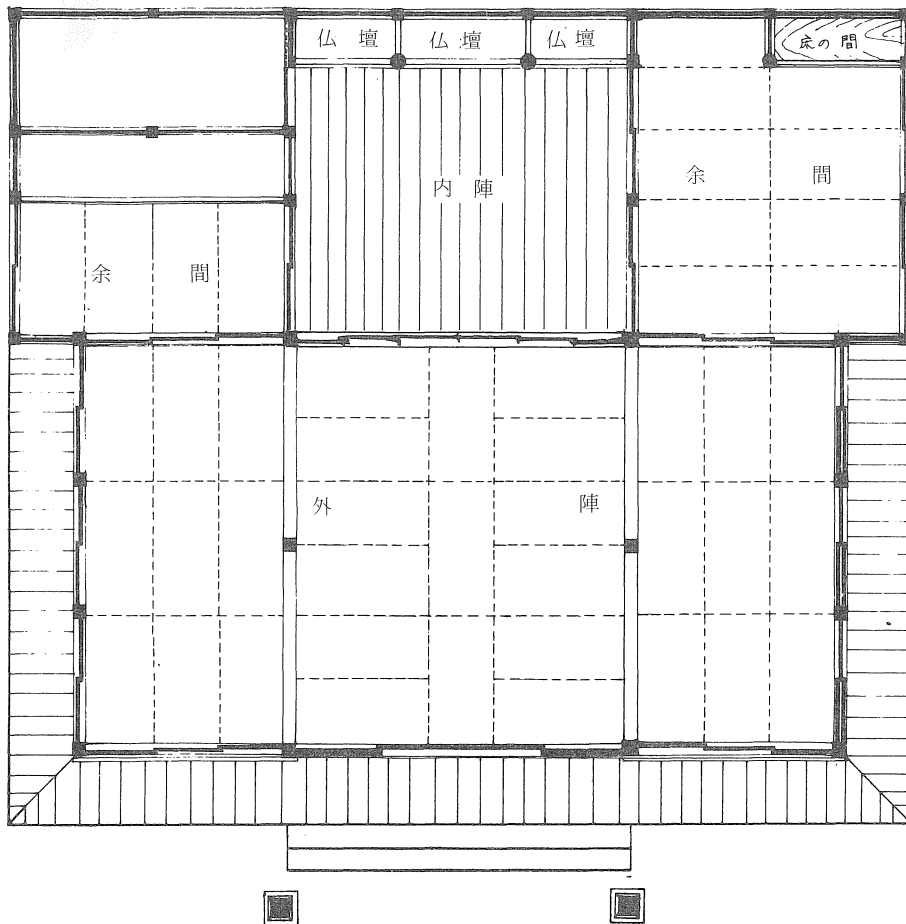


図4 徳圓寺復原図

- 一 木佛尊像 天明七年丁未二月七日
勝鬘寺下尾州
中嶋郡福嶋村
徳圓寺
願主
博洵

- 一 御家老中御印書 老通

覚

- 一 当寺儀先年四十三年巳前寛保二壬戌年(1742)
八月廿日ニ海東郡廻江村より易地仕候
中興開基
前住秀善代

- 一 只今迄之御堂大破仕去ル明和二年酉(1765)
三月長五間梁三間ニ両方へ九尺ツツ之附下而再
建仕候

現住博洵代

- 一 木佛尊像 御長 老 躰
老尺八寸

貞享四年^{丁卯}十二月 (1687) 十五日一如上人判願上
利鏡

一 境地 五畝歩
先住 秀善宝曆八戌寅年正月六日
二代目 博洵

- 一 大谷本願寺釋常如判書之
延宝五歳丁巳季 (1677) 冬下向
天明四辰年迄百八年ニ成

(図 5)

親鸞聖人御影

御名和願親鸞聖人
勝鬘寺下尾州
海東郡蟹江村
徳円寺常住物也
願主 釋 万休

これと同文の一部が寛政元年 (1789) と 6 年にも書か
れている。

以上により延宝 5 年 (1677) には蟹江村にあり、延享
3 年 (1746) には現在地に寺が存在したことが知られ、
寛保 2 年 (1742) に現在地に移ったことが判明する。ま
た天明 7 年より僅か十七年前の明和二年 (1765) に再建
された堂のことを記しているのであるから、この記録は
信頼出来ると思われる。しかし長 5 間、奥行 3 間の両方
に 9 尺の附下とあるのは、外陣中央間と内陣の奥行を合
わせて 5 間、梁間の実長は 2 間半であり、来迎柱通の柱
間は 3 間になっているので、これを 3 間と見れば外陣両
脇間の中は 9 尺程であるので両方に 9 尺の附下はほぼ該
当する (図 3, 4)。

- 一 大谷本願寺 釋 教如判
天正十年 (1582) 二月三日書之
天明四辰年迄式百三年ニ成
證如上人真影勝万寺門徒願主
御名證如上人
(中 略)

このようにこの寺は明和 2 年再建であるが、その前に
天正 10 年には證如上人の真影を、延宝 5 年には親鸞聖人
の御影を、そして、貞享 4 年には木仏尊像 (長さ 1 尺八
寸) を持っていたことが知られる。しかし、貞享 4 年
(1687) の釋一如判、願主利鏡の像の他に本尊阿弥陀如
来御長一尺八寸木仏立像が拵がって、「木仏尊像者
天明七年丁未二月七日勝鬘寺下尾州中嶋郡福嶋村徳円寺
願主博洵」とあり、その点天明七年の書上とも一致し、
これが現本尊と察せられる。とすれば、本堂再建の明和
2 年 (1765) には貞享 4 年に利鏡が一如上人に判を願っ
た像しかなく、これは本山から下付された像ではなかつ
たので、未だ来迎壁やその前の須弥壇を設ける必要はな
かつたと考えられる。

- 一 大谷本願寺 釋 從如 判
延享三丙寅歳 (1746) 八月十五日
天明四辰年迄三十九年ニ成
太子真影勝鬘寺下尾州中嶋郡福嶋村
徳円寺什物也
願主 秀 善
(中 略)

次に来迎柱を入れ須弥壇を設け、それに伴って内陣
の後方への拡張を行なった時は余間との境の虹梁の絵様
などから推すと、幕末に近い頃と察せられる。

- 一 大谷本願寺 釋 從如 判
延享三丙寅歳 (1746) 八月十五日
七高祖真影 勝鬘寺下尾州中嶋郡福嶋村
徳円寺什物也
願主 秀 善

結 び

この 2 棟は尾張における江戸中期の浄土真宗小本堂の
2 例であるが、西光寺本堂は改造も少なく、内陣に一直
線仏壇を備えて、後門を用いず、北余間を客間にしてい
る古式をよく伝える。明和 2 年 (1765) 建立の徳円寺本
堂は復原すると、内陣背面に一直線仏壇ができるのみで
なく、北余間が客室になる他、南余間の西の仏壇の裏に別
室ができると言う、極めて異例な平面が成立するのであ
る。しかし江戸時代中期ともなると、内陣向拝はもとよ
り、外陣にも虹梁を用いるなど、仏堂風な意匠がかなり
使用されているのが注目される。

- 一 九字名号巻幅 宣如上人御筆
一 薬師弥陀堂 薬師一躰 木像
弥陀 " 木像
地藏 " 木像

先年より安置仕候
中嶋郡福嶋村
徳円寺
現住 博洵

- 一 廿八日講 御書 巻通 一如判
一 十二月女人講 御書 巻通 乗如判
一 御文 五帖 巻部 乗如判